

設問1

アルツハイマー型認知症の症状について、誤っているものはどれか、1つ選べ。

A1	潜行性に発症し、緩徐に進行する。
A2	遠隔記憶障害で発症することが多い。
A3	進行に伴い、見当識障害や遂行機能障害、視空間障害が加わる。
A4	病識の低下、取り繕い反応といった特徴的な対人行動が見られる。
A5	病初期から著明な局所神経症状を認めるのはまれである。

正解 A2

近時記憶障害で発症することが多く、遠隔記憶は比較的保たれている。

設問2

レビー小体型認知症について、誤っているものはどれか、1つ選べ。

A1	すくみ足、小刻み歩行などのパーキンソニズムが見られる。
A2	レム睡眠時行動障害によって、ベッド周囲の壁を殴ったり蹴飛ばしたりすることがある。
A3	認知機能の変動にともなう注意力や集中力の低下により転倒リスクが高くなる。
A4	具体的な内容の反復した幻視が多い。
A5	前頭側頭葉の変性による常同行動が見られる。

正解 A5

前頭側頭葉の変性による常同行動は前頭側頭型認知症で見られる症状である。

設問3

認知症の行動・心理症状(BPSD)について、誤っているものはどれか、1つ選べ。

A1	痛み、便秘、発熱など身体的苦痛で生じる場合が多い。
A2	BPSDはできるだけ早く薬物療法で対応することが重要である。
A3	BPSDは生活機能や認知機能の悪化と関連がある。
A4	アパシーは身体機能の廃用や低栄養にもつながりやすい。
A5	妄想の内容は被害的であることが多い。

正解 A2

BPSDには、非薬物療法を薬物療法より優先して行うことを原則とする。

設問4

認知症者の身体機能について、正しいのはどれか、1つ選べ。

A1	健常高齢者に比較して、活動性が低下しているため廃用リスクは高い。
A2	自ら症状を訴えることは容易なため、身体的合併症の発見は早期に可能である。
A3	認知的フレイルとは重度認知症と身体的フレイルが併存した状態である。
A4	アルツハイマー型認知症の転倒リスクはレビー小体型認知症の転倒リスクより高い。
A5	運動介入を必要とする身体的合併症の割合は低い。

正解 A1

活動量は健常高齢者に比較して、在宅認知症高齢者で約2割、施設入所認知症高齢者で約4割低下しているとされる。

設問5

認知症者の理学療法について、誤っているものはどれか、1つ選べ。

A1	BPSDが増悪しないよう表情の変化などに注意し負荷量をコントロールする。
A2	地域ではウォーキングや簡単な運動、楽しみやすい身体活動を奨励する。
A3	言葉かけはシンプルでわかりやすく、失敗体験をなるべくさせないこと。
A4	介護負担を軽減する効果はない。
A5	混乱したり怒り出したりするときは、間を置くことも必要である。

正解 A4

移動能力やADLの改善に伴い介護負担も軽減するとされる。